

トランスファーにおける看・介護スタッフの身体的負担を軽減 ～北欧式トランスファーテクニック導入～

JA長野厚生連佐久総合病院 老人保健施設こうみ 井出 由香利

〈サークル紹介〉

「いいなー」「ほーう」という方法を探求する、稲の穂のようにしなり強く、実りあるものを探求する、という意味をかけて「いなほー」とサークル名を決め取り組みました。

〈テーマ選定〉

◎-3点、○-2点、△-1点

備考	順位	合計点	部長方針	職場目標	施設方針	評価点	効果	重要度	緊要度	経済性	実現性	利用者要求度	解決度	合計点	順位	備考
W			1.0	1.0	1.0	課題点										W
	3	7	○	◎	○	トランスファーにおける身体的負担を軽減	◎	◎	△	◎	◎	◎	◎	18	1	決定!
	1	9	◎	◎	◎	施設内排泄物ニオイ対策	○	○	○	△	○	○	△	16	2	
	2	8	◎	◎	◎	パジャマ更衣の利用者様を増やそう	○	○	△	◎	○	○	○	15	3	
	5	3	△	△	△	検温時における体温計の紛失をなくそう	△	△	◎	○	○	○	○	13	5	
	4	5	△	○	○	デイケア送迎朝の迎えの無駄をなくそう	◎	○	△	△	◎	○	○	14	4	

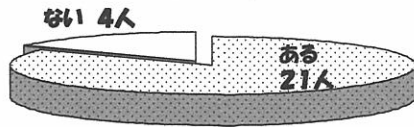
老健ではトランスファーを行うことが多く利用者様の加齢に伴う重度化から看・介護スタッフの身体的負担も深刻化しています。

日常生活訓練である残存機能を生かす等の老健の役割を念頭におき、利用者様、スタッフ共に安全、安楽にトランスファーが行えないかと考えました。

〈取り組む必要性の明確化〉

図1

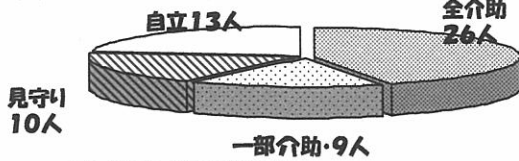
トランスファー時身体的負担があるか？



看・介護スタッフ25名
アンケート期間10月20日～10月25日

図2

利用者様 トランスファー介助レベル



8月9月平均利用者数58名

* 佐久総合病院ES調査より

図3

介護福祉士とケアワーカーを対象に
No11「なんとなく疲れやすい」

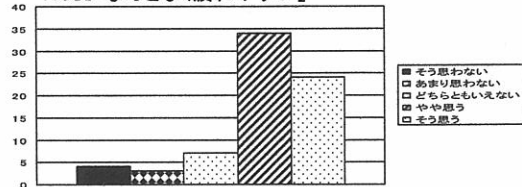
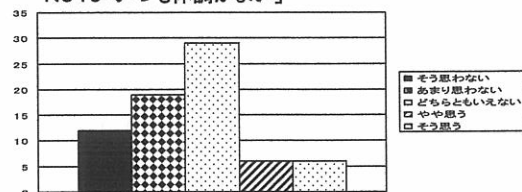


図4

介護福祉士とケアワーカーを対象に
No49「いつも体調がよい」



〈活動計画表〉



実施項目	担当者	2005/08	2005/09	2005/10	2005/11	2005/12	2006/01
テーマの選定	QCメンバー	☆☆	→				
攻め所と目標の設定	QCメンバー		☆☆	→			
方策の立案	QCメンバー			☆☆	→		
成功シナリオの追求	QCメンバー				☆☆	→	
成功シナリオの実施	看・介護スタッフ					☆☆	→
効果の確認	QCメンバー						☆☆
標準化と管理の定着	QCメンバー						☆☆



サークルチーム名		いなほー (2001年4月結成)				
リーダー氏名 (職種)	井出 由香利 (介護福祉士)	所属 部門	看護 管理	医療技術 事務	月あたりの会合回数	2回
リーダー経験年数	1年7ヶ月		その他(介護)		平均会合時間	60分
メンバーの数	計9名 うち男3名 うち女6名	活動 内容	質	能率	平均会合出席率	90%
			CS	モラル	テーマ歴 (このテーマで)	1件目
			コスト	安全		

〈攻め所と目標の設定〉

特性・項目	ありたい姿	現在の姿	ギャップ	攻め所の明確化	期待効果	採否	
特性	看・介護スタッフの身体的負担	身体的負担を感じるスタッフを6人にする	身体的負担を感じているスタッフ21人	身体的負担のあるスタッフ15人軽減	—	—	
特性を実現するための項目	移乗方法	効率よく移乗できる	・利用者様の身体機能レベルに合っていない ・立位移乗しか行っていない	スタッフの判断に任されている	①利用者様の身体機能レベルに合った移乗方法にする	大	採用
		どの移乗方法に対しても2人で移乗する	平行移乗の利用者様に対してのみ2人で移乗している	移乗方法によっては1人で移乗している	②看・介護スタッフの増員	小	不採用
	スタッフ	ボディ・メカニクスを理解した移乗をする	自分の持つ腕力に依存している	スタッフの判断に任されている	③ボディ・メカニクスの知識を共有する	中	採用
	環境	整理・整頓され、移乗しやすい空間である	ベッド、ロッカーの設置位置が悪い	危険性があり、移乗介助しにくい	④移乗に必要な空間確保	中	採用

〈目標の設定〉

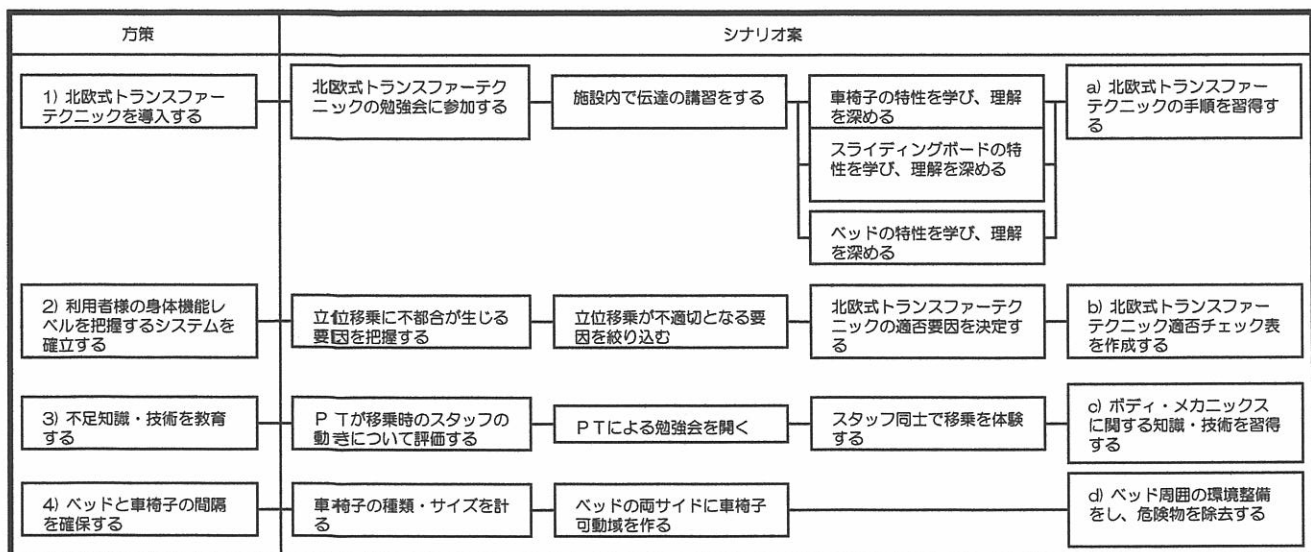
身体的負担がある21人の看・介護スタッフの人数を6人にする！！

腰痛が慢性化している6人のスタッフについては早急な改善が困難と考えた。

〈方策の立案〉

攻め所（着眼点）	方策案	期待効果	採否	順位
①利用者様の身体機能レベルに合った移乗方法にする	1)北欧式トランスファーを導入する	効果：大	採用	1
	2)利用者様の身体機能レベルを把握するシステム確立	効果：大	採用	2
③ボディ・メカニクスの知識を共有する	3)不足知識・技術を教育する	効果：中	採用	3
④移乗に必要な空間確保	4)ベッドと車椅子の間隔を確保	効果：中	採用	4
	5)ロッカーの位置を移動する	効果：小	不採用	—

〈成功シナリオの追求〉



シナリオ案に対する障害の予測と事前防止策の検討結果

シナリオ案	障害・悪影響	処置	総合判定
a) 北欧式トランスファーテクニックの手順を習得する	使用物品の準備に手間がかかる	個々にスライディングボードを設置する	採用
b) 北欧式トランスファーテクニック適否チェック表を作成する	(なし)	—	採用
c) ボディ・メカニクスに関する知識・技術を習得する	(なし)	—	採用
d) ベッド周囲の環境整備をし、危険物を除去する	(なし)	—	採用

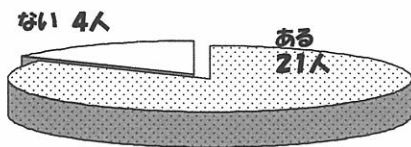
	10/19	11/2	16	30	12/14	28	現在
QC メンバー	アンケート調査 ◆◆	補助具特性の説明 ◆◆	中間評価 ◆◆		アンケート調査 ◆◆		
看・介護 スタッフ	伝達講習 ●● PT勉強会 ●● ベッド周囲の環境整備 ●●	補助具特性の理解 ●●	北欧式トランスファーの実施 ←				

有形効果

北欧式トランスファーテクニック
導入前

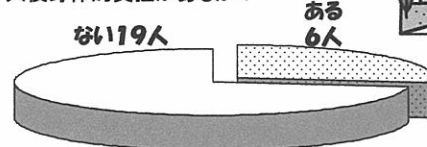
導入後

図1 トランスファー時身体的負担があるか？



看・介護スタッフ25名
アンケート期間10月20日～10月25日

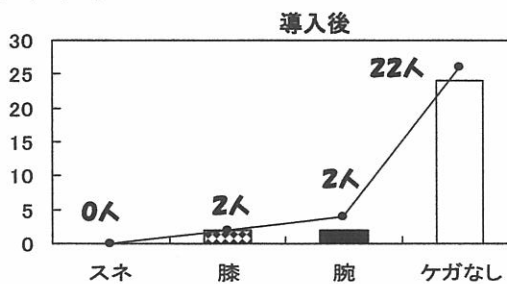
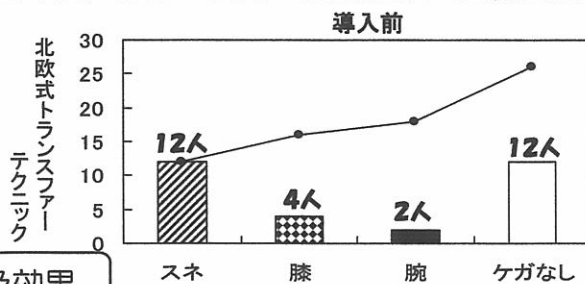
図2 北欧式トランスファーテクニック
導入後身体的負担があるか？



看・介護スタッフ25名(導入後)
アンケート期間11月20日～11月23日



導入後アンケート調査を行った結果、トランスファー時の看・介護スタッフの身体的負担を
21人 から 6人 に軽減され 目標達成!!!!



波及効果

★利用者様★

- ・導入前は「下手だな」「男の職員を呼べ」等の声が聞かれたが、導入後には「こりゃ楽でいいな」「うまいぞ」等の声が聞かれるようになり不安感の軽減につながった。
- ・不安感の軽減により、しがみつく、つっぱってしまう、といった無駄な力をいれてしまうのではなく、健側下肢でふんばる等の残存機能をうまく活用することができた。
- ・2カ月間のトランスファー時の怪我について調査したところ、全介助レベルにある26人の利用者様のうち、14人の利用者様に怪我をさせてしまったことがわかったが、導入後下肢を車椅子にぶつけてしまうことがなく、スムーズに移乗でき、スネの傷がなくなった。
- ・利用者様の御家族からも「こんなにいいものがあるなら、家に帰ってから使いたい」「やり方を教えてほしい」等の要望が聞かれた。

★スタッフ★

- ・移乗に対する苦手意識がなくなった。
- ・下肢に怪我をさせてしまうのではないかと、という心配が少なくなり精神的負担の軽減にもなった。
- ・北欧式トランスファーの手技は理解できていても、実際にどのような方に対して必要なのかという疑問があったが、適否チェック表ができたことで判断基準が明確になった。

〈標準化と管理の定着化〉

なぜ	なにを	だれが	いつ	どこで	どうする
標準化	北欧式トランスファー適・否チェック表の運用手順を	師長が	2005年1月に	—	業務マニュアルを改訂した
教育・訓練	北欧式トランスファーテクニックを	PT・OTと学習係が	4月と10月に	学習会で	指導する
	ボディ・メカニクスに関する知識・技術を	PTと介護福祉士が	4月と10月に	学習会で	指導する
維持管理	北欧式トランスファー適・否チェック表を	学習係が	3月と9月に	スタッフルームで	検討する
	ベッド周囲の環境を	遅番が	連日	各居室で	整備する

〈反省と今後の対応〉

	反省	今後の計画	いつ
サークル運営面	専門職の協力支援が得られ、テーマの取り組みの幅が広がった	大きな問題が生じた時には、積極的に専門職に相談し、連携を図る	次回の活動時
	勤務時間の都合でサークルメンバー全員が会合にそろえることが難しかった	役割分担を明確にし、全員で活動する	次回の活動時
	「課題達成型QCストーリー」の進め方を習得し、共有するのに時間を要した	QC手法をより熟知するため、活動開始前にメンバーで手法の勉強をする	次回の活動開始時
ステップアップ解決	方策案の発想の広がりがなかった	アイディア発想の雰囲気作りをする	日常活動で実行
	数値で、現在の姿を十分に評価することができなかった	データ把握においては、自分たちの尺度を見つけ、工夫する	次回の活動時

〈今後の計画〉

	今後の課題	今後の推進	いつ
在宅介護者への対応	在宅における介護者の身体的負担の声が聞かれるが未対応	今回の成果から在宅介護者の負担軽減に取り組む	18年度QCサークルへ継続
他職場への水平展開	院内発表大会、病院広報誌で関心を得た職場へ実技学習会を開催を図る。	病棟・他施設に実技学習会を計画する	検討：依頼時

北欧式トランスファーテクニックを導入することで、スタッフの身体的負担の軽減を図ることができました。また、北欧式トランスファーは全ての利用者様に適応するわけではないため、今回適・否チェック表を作成し、活用することで、利用者様の機能レベルを把握し、残存機能を活用する、ということの意識の向上につなげることができました。スライディングボードは、衣類とシーツとが接している部分の摩擦を取り除くことができるが、使い方を間違えると転落等のリスクがあるため、介護器具の特性を熟知し「使えないモノ」「危険なモノ」とならないよう、使いこなせることが大切であることを痛感しました。

介護は「利用者様にやさしく、介護者にもやさしい」必要があると考えます。今後もトランスファーに限らず、利用者様の残存機能を十分に活用し身体機能レベルの維持・向上を図るとともに、身体的、精神的に健全なスタッフにより安全で継続的な介護の提供に努められるよう「いいなー」という方法を探究していきたいと思っております。